

### 第三節 発想は大胆に、行動は穏健にー長洲県政の政治展開

1. 21世紀のキーワード「国際化」と「地方化」
  - 国際化と地方化 ●「国民国家」の変容の始まり
  - 「地球的に考え、地域で行動する」
2. 地方自治の可能性の拡大ー勝てない喧嘩はしない
  - (1) 地方の政策的自立
  - (2) 「首都圏サミット」の提唱ー神奈川のスタンス
3. 絶えず時代を読むー「革新」の本質
  - (1) 革新とは時代を読むこと
    - 「発想は大胆に、行動は穏健に」
  - (2) 長洲さんと国政の関わり
    - 歴代総理との関係 ●宮沢さんにも親近感、中曽根さんに警戒心
4. 「社民・リベラル」政権としての長洲県政
  - (1) 革新を「革新」する長洲県政
  - (2) 時代を読めなかった社民勢力
    - 与党第一党＝社会党との乖離 ●「先進国政治のスタンダード＝社民勢力」の欠如
  - (3) ミッテランになれなかった長洲さん
    - 長洲さんの社民主義 ●国政への意欲を失った長洲さん
    - 知事職20年で燃え尽きた長洲さん

以上で、長洲県政の政策展開の特徴をみてきましたが、次に長洲県政を政治的側面とくに政治理念、政治姿勢の面から特徴づけてみたいと思います。

#### 1. 21世紀のキーワード「国際化」と「地方化」

##### ●国際化と地方化

第一は、「国際化」と「地方化」という二一世紀に向けての時代のキーワードを、県政の場で先取りして実践してきたことです。たしか二期目（七九ー八三年）後半ころから、長洲県政のメインスローガンの一つに「地域に根ざし、世界に開く」というのがあります。その真意は、国際化が進み、世界が狭くなればなるほど地域の個性が大切になる。個性的な地域であればあるほど、世界とふかくつながることができる。国際化といっても、具体的な中身は日本のある地域と外国のある地域が、また、日本のある市民と外国のある市民が結びつくことであり、地域や市民抜きの抽象的な国際化というものがあるわけではない、というのが長洲さんの信念だったわけです。

とくに、八六年に改定された「第二次新神奈川計画」では「地域に根ざした福祉社会神奈川をつくる」、「世界に開かれた国際文化圏神奈川をつくる」の二つがメインテーマになり、さまざまな施策が体系化されましたが、国際化に関連しては、①県内各地に国際水準のアメニティを具えた質の高い都市をつくる都市政策の強化、②情報革命と経済のグローバル化時代に対応する比較優位確保のための産業政策の確立、③神奈川の社会を内側から、草の根から、県民の意識や社会システムの面からも国際化していく「内なる国際化」を推進し、外国籍県民にも気持ちよく住んでもらえるよう

な「開かれた社会づくり」を進める、などが重点目標になりました。

### ●「国民国家」の変容の始まり

また、七八年に「地方の時代」を提唱した際、バックボーンになる考え方として、国家論の問題がありました。長洲さんは常々次のような趣旨のことを強調されていた。つまり「今や国家は地域に噴出する問題を解決するにはあまりにも大きすぎ、世界的に噴出する問題を解くにはあまりに小さすぎる。国民国家 (Nation State) は、その三〇〇年の歴史の中でいまや最大の転機に立っている。国家の一部の機能は益々地方政府に、そして一部の機能はますます世界政府に吸収されていき、国家そのものの分解と変容が始まるだろう」(『世界』1978. 10月号) というものでした。欧州連合 (EU) の形成、先進国サミットの定着、自由貿易地域 (FTA) の拡大など、ここ二〇数年の世界と日本の動きは、この見通しの正しさを立証していると思います (ここ二、三年はブッシュの「単独行動主義」によって歴史の逆行がみられますが)。

少子高齢化に対応する地域福祉の問題、環境問題やゴミ対策、町づくり、村おこしの問題、教育の問題など、どれひとつとっても霞が関発の全国画一の政策では問題が解決できなくなっていることが明らかになっています。また、地球の温暖化、熱帯雨林の減少、砂漠の拡大、地域紛争の激化、テロの温床となる第三世界の飢餓と貧困、大量の難民の発生など、どれひとつとっても一国政府の手には負えず、地球市民社会を維持するためには国連を中心とする国際協力が不可欠になっています。

### ●「地球的に考え、地域で行動する」

まさに「Global thinking Local action=地球的に考え、地域的に行動する」、あるいは逆に「Local thinking Global action=地域的に考え、地球的に行動する」時代になってきています。また、長洲さんは国家を大前提に、できるだけ国境をオープンにしていこうとする「国際化」と、国境そのものがボーダーレス化していく「地球化=グローバリゼーション」を区別していました。そして、グローバリゼーションと市場経済が結びつくとき、地域経済がどう変貌するのか、つよい関心をもっていました。地域が直接、世界市場の競争にさらされるとき、地域の競争力をどう確保するのか、地域の生き残りがよりきびしくなることを予測していました。いずれにせよ、地域と世界がダイレクトにつながり合う時代になってきているわけで、世界がグローバル化すればするほど、地域の存在と役割がより大きくなる方向に変化していくことを、長洲さんは今から二六年前の一九七八年に早くも指摘されていたのです。

## 2. 地方自治の可能性の拡大—勝てない喧嘩はしない

### (1) 地方の政策的自立

第二には、地方自治の可能性を拡大したことが挙げられます。すでに触れたように「地方の時代」を提唱した長洲さんは、これを実体化するには地方が実力をもつこと、とくに政策面で国に依存・従属することをやめ、地方の政策的自主、自立を強めなければならないと考えました。当時はまだ

「政策づくりは国家官僚の専権事項」という考えが根づよく、地方は国から「政策」を頂いてそれぞれの地域で「対策」を考え、具体化に励めばよい、という考え方が支配的でした。

そうしたなかで、長洲さんは県の政策的自立をめざし、国に先駆けて情報公開、プライバシー保護、環境アセスメント、アボイド（災害回避）行政などを制度化したり、産業政策や科学技術政策、文化行政などについて、地域に根ざした自前の政策を展開しました。外交への市民参加を目指す「国際外交」を展開して、国際化時代にますます重要になる自治体の国際的役割を高めてきたことなどがそうした努力の主な現れです。

全国の府県に先駆ける政策展開にあたっては、必ず県庁内外から強い政治的風圧がかかってきました。保守系議会筋からは「長洲は一番乗りを狙いすぎる」「功名心が強すぎる」「次々に新しい政策を出されたら議会は消化不良を起こす」といった声があがりました。情報公開の制度化をめざしたとき、「これは官庁革命だ。許せない」といってとくに風圧がつよかったと思います。

長洲さんはよく「勝てないケンカはしない。勝てる状況をつくってから勝負する。そのためには時代を味方につけることだ」といっていました。情報公開の制度化の際も、「知る権利」を求める国民世論をじっと見つめながら、大阪府、東京都と綿密に打ち合わせ、大阪先攻、神奈川中攻め、東京後攻めの陣形を布き、全国的な流れを起こしながら進めたのです。知事の名代で大阪に岸知事を訪ね、三分間の面会時間では足りず、知事室から玄関までの時間も頂いて大阪先攻をお願いしたときの、息詰まるような会話を今も覚えています。

## （２）「首都圏サミット」の提唱—神奈川のスタンス

このなかで、もう一つ重要なことは長洲知事が一都三県二市（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県、横浜市、川崎市）による「首都圏サミット」を提唱し、具体化した（七九年）ことです。二つの政令市を抱える県の知事として、また、隣接の東京都からの人口流入による「神奈川都民」の増加や通過交通の増大による大気汚染などの問題を抱えた県の知事として、都県を超えた広域行政の必要性を実感されていたからだと思いますが、これを国主導の道州制によらないで、下からの自主的な府県連合によって広域的課題に対応していこうとしたもので、府県制そのものへの問題提起をはらんでいたのですが、その後行政官型の首長が増えるにつれ、当初の問題意識は薄れていきました。最近、新しく神奈川知事になられた松沢さんによって「首都圏連合」構想が提起されており、今後の展開が注目されます。

当時、首都圏問題に臨む県のスタンスは、次のようなものでした。

第一に、神奈川は首都圏の有力な一員であり、首都圏のあり方、発展方向、国土政策における位置づけなどに重大な利害関係を有している。したがって、これらの共通課題については他の都縣市との間で政策的な協調と協同を図っていく。

第二に、神奈川は首都圏に埋没することなく、たえず自らの主体性、独自性を追及し、確立していく。東京に隣接するメリットを活用する一方、デメリットを克服し、東京の一部として吸収されることのないよう首都圏内部で競争と共存の関係を創っていく。

第三に、神奈川は「中央」に対してはあくまで「地方」であることを自覚し、地方の立場に立って分権型社会、分散型国土づくりを主張していく。首都圏とくに首都東京だけが繁栄と膨張を続け、

他の地域が衰退していくことは国の正常な発展ではない。首都圏とくに東京への一極集中型の垂直的な地域構造が、結局は国土、国力を脆弱にしていくので、これを避ける努力をしていく。

### 3. 絶えず時代を読む－「革新」の本質

#### (1) 革新とは時代を読むこと

第三は、政治姿勢ないし政治行動のプリンシプルとでもいうべきものですが、私が気づいている限りでいえば、長洲さんはたえず時代を読み、現在の自分の位置を測る努力を続けていました。「<革新>とは特定のイデオロギーのことではなく、時代への洞察力だ」というのが長洲さんの口ぐせでした。このため、多忙な日常にもかかわらず、読書量は実に豊富でした。より多くの時間をもっているはずの私に、最近読んだ良書を推薦してくれるほどでした。後に「月例談話」のなかで「今月の一冊」をとりあげて紹介するようになったのも、「読書家・長洲」さんならではのことでした。特段の案件がないときはもちろん、案件のあるときでも、内外に大きな動きのあったとき、長洲さんと私の会話は、もっぱら世界と日本の現状分析にあてられました。私が県庁を去った後しばらくして「久保君がいなくなって一番困ったのは、世界や日本の現状分析を日常的に話し合う機会がなくなったことだ」といわれたことを覚えています。県庁を去って私も同じことを感じていたからです。

私が長洲さんと一緒に仕事をした七五年から九一年までの時期は、国際的にも国内的にも時代を画するような激動が続いたので、会話はいつも熱を帯びました。国際的には東西冷戦のピークから終焉へ、七五年ぶりのソ連共産主義体制の崩壊と東欧の解放、ベルリンの壁の崩壊から東西ドイツの統一へ、毛沢東の死と文化大革命の終息、鄧小平による「改革・開放」政策への大転換、中東の動乱と湾岸危機、レーガン、サッチャーによる新保守主義の台頭、欧州連合（EU）のスタートなどの大きな動きが次々に起こっていました。

国内でも、ロッキード事件による田中内閣退陣を機に自民党長期政権の金権腐敗体質への国民的批判が高まり、保守支配の動揺と保革伯仲、やがて五五年体制の崩壊と連立政権時代への移行など、こちらも時代を画する動きが相次いで起こったため、長洲さんの「時代を読む」作業への参画はいつも真剣勝負でした。自らの政治スタンスをどうするかという問題に直結しているので、議論は熱を帯び、まさに時代をともに生きているという実感がありました。

#### ●「発想は大胆に、行動は穏健に」

もう一つ印象に残っているのは、「発想は大胆に、行動は穏健に（Radical Thinking, Gradual Action）」というプリンシプルをもっておられたことです。問題を分析し、課題を明らかにする過程ではあらゆる先入観を取り払って自由に、ラジカル（根源的）に発想して問題の本質を究めるが、課題の解決にあたっては主観主義（独りよがり）に陥らないよう、浮き上がらないよう慎重にことを進めるスタンスを崩しませんでした。支持勢力の一部から「長洲さんは現実と妥協し過ぎる」「長洲さんは保守に甘い、弱腰だ」といった批判がしばしば出たのはこうしたことに起因する面があったかもしれません。

しかし、長洲さんは「玉砕は美しいかもしれないが、無責任だ。私は勝てない喧嘩（けんか）はしない。勝てる陣形を作ってから勝負する。そのためには時代を味方につけることだ」との信念を変えませんでした。情報公開、環境アセスメント、民際外交、非核兵器県宣言など、県庁内外に抵抗の強かった政策の推進にあたって、身をもってこのプリンシプルを実践されたといっていいいでしょう。「小さく生んで、大きく育てる」というのも長洲さんの好きな言葉の一つでした。

ついでにもう一つつけ加えると、長洲さんは自助努力のない、行政依存型の権利主張にはきびしく対応しましたが、自助努力(対案)を伴った参画型の政策提言には積極的に対応するスタンスをとったことです。「食えないから補助金をくれ、という要求には応じられないが、こうすれば食えるようになるので後押しして欲しい、という対案つきの要求には応えなければならない」という基本姿勢に立って、中小企業、農林漁業、福祉などの諸団体に対する補助金の大幅な見直しが行われました。

「弱者切り捨てだ」「長洲は革新じゃない」といった批判が起こった反面、バラマキ型補助金に白い目を向けていたそれぞれの団体の改革派には支持され、県政を取り巻く「圧力団体」の内部に新しい変化が起こる契機になったことも事実です。

## (2) 長洲さんと国政の関わり

### ●歴代総理との関係

国政との関係をみると、長洲県政はロッキード事件で田中首相が退陣したあと政権についた三木首相の時代に始まり、福田、大平、鈴木、中曽根、竹下、宇野、海部、宮沢、細川、羽田、村山の各内閣へと続く戦後政治の激動と再編成の時期と重なっていますが、長洲さんが政治的に最も活気づいたのは八九年の「土井ブーム」のときと、九三年の細川内閣成立のときでした。また、歴代首相のなかで長洲さんが最も親しくつき合い、または親近感をもっていた首相は大平、宮沢、細川、村山の各総理でした。

とくに、大平さんとは一橋大学の同窓というばかりでなく、政治姿勢にも共鳴するものがあつたらしく、とても親密な関係だったと思います。「総理と語る」のTV番組の相手にも選ばれ、この席で国と地方の関係について話し合い、補助金の整理統合や地方の国政参加—地方が大きく利害関係を持つ国のプロジェクトについて、事前に地方と協議する一などが合意されたこともありましたが、私も大平さんとの懇談の場に同席したことがありましたが、補佐官としての私の労をねぎらうとともに、長洲さんのブレーン体制がどうなっているのか、大分詳しく聞かれたことを覚えています。

### ●宮沢さんにも親近感、中曽根さんに警戒心

大平さんだけでなく宮沢さんにも親近感をもっていて、「宮沢さんは社会党よりも社会民主主義をよく理解しているのではないか、社会党よりも社民主義の政策を先取りしている。大平、宮沢さんが中道右派とすれば、ボクは中道左派ぐらいの距離かな」と冗談めかして感想を漏らされたことがありました。

これに反し、中曽根さんには強い警戒心をもっていました。とくに、「日本列島不沈空母論」の日米軍事同盟強化論や憲法改定につながる「戦後政治の総決算」路線に強く反発し、戦後改革の成果を

チャラにするようないかなる試みにもきびしく対決する姿勢を示していました。もちろん、戦後改革の歪みがいろいろな場面に出てきていることは感じていましたが、それは戦後改革を否定することではなく、国際化、グローバル化、脱工業化、知識・情報社会化、地球環境問題などを踏まえた一層の「構造改革」によってオルタナティブ・ジャパン（新しいかたちの日本）を創っていくがいけない、と考えていました。

村山さんとはとくに親しい間柄ではありませんでしたが、戦後五〇年の国会決議がお流れになり、政府声明に終わったことを大変残念がるとともに、この声明の意義を高く評価していました。そして、村山内閣のもとで発足した地方分権推進委員会の委員を快諾されたのでした。

#### 4. 「社民・リベラル」政権としての長洲県政

##### (1) 革新を「革新」する長洲県政

最後になりますが、長洲県政は地方政府のレベルではありましたが、日本で初めての本格的な「社民・リベラル」政権だったといいと思います。長洲さんはもともとはマルキストだったのですが、マルクス主義の脱皮・現代化を唱え、一九六〇年前後の社会党、共産党を巻き込んだ「構造改革」論争の際は構造改革派の先頭に立って論陣を張りましたが、このころからマルクス主義を相対化する立場に立ち、ヨーロッパ型の社会民主主義に大きく方向転換されました。

したがって一九七五（昭和五〇）年に革新知事として初当選したとき、「私は革新を革新する立場だ」といって、革新＝社共共闘というマスコミの規定に違和感をもち、反発を感じていました。いつも「革新」にかわる適切な言葉を求めて苦吟されていたのが印象的でした。これには私もついにいい知恵が出せませんでした。そして、古い社会主義の教条から離れられず、構造改革派の江田三郎さんを追放した社会党にも距離感を持ち、「先進国政治のグローバル・スタンダードであるヨーロッパ型社会民主党が日本に存在しないのは、国民にとって不幸なことだ。社会党は早急に日本型社民党に脱皮すべきだ」といわれていました。

##### (2) 時代を読めなかった社民勢力

###### ●与党第一党＝社会党との乖離

しかし、「社民・リベラル」政権が二〇年も続いたにもかかわらず、県内で社民的政治勢力が伸張することはなかったのです。むしろ、長洲担ぎ出しの中心的役割を果たし、総評系の県評（神奈川県地方労働組合評議会）を基盤に自民党と拮抗する力を持ち、二〇年間、与党第一党を占めてきた神奈川の社会党は、選挙に強い長洲さん（一期目一五〇万票、二期一五期二〇〇万を越す大量得票、支持率六〇―八〇で安定）に安易にオンブするばかりで、本来の意味での社民党に脱皮するきびしい努力もなく、長洲さんが任期を重ねるにつれて先細りしていきました。

それは長洲さんにとって歯がゆい事態でしたが、当時の社会党は労働組合党で、ソ連型社会主義を信奉する左派（社会主義協会系）の影響力の強いイデオロギー政党の傾向が強かったので、当然のことながら高度成長の終焉や産業構造の変化による労働運動の衰退、ソ連型社会主義の崩壊などに

よって解党的危機に直面することになりました。当時、親しく接していた社会党の知的、政策的貧困さに、深く失望していました。その後の社会党の凋落は、政党の責務である時代への洞察力を失い、国民に魅力ある進路を示せず、たえざる自己革新を怠ってきた報いとして、まさに起きるべくして起きた結果とみていました。

### ●「先進国政治のスタンダード＝社民勢力」の欠如

こうした解党的危機を克服するには日本型社民党への脱皮しか道はなかったのですが、残念ながら社会党には社会民主主義を正しく理解していた人はごく少数で、しかも冷や飯を食べていました。とくに活動家層には皆無に近かったといっていいいでしょう。今の社民党も西欧型社民党とは程遠く、すっかりやせ細ってしまいました。こうして日本はいま、ヨーロッパ先進国の政治的スタンダードともいうべき社会民主主義的政治勢力を大きく欠いたままの政治構造になっているのです。長洲さんの嘆いた「不幸な」状態が続き、むしろつよまっています。

最近、二大政党化をめざす政界再編のなかで、社会民主主義はもうダメだ、それどころか「社会」という言葉さえもダサイということになっているようで、政治構造まで保守党対社民党の欧州型でなく、保守二大政党型のアメリカに近づきつつありますが、アメリカのコピーのような国になって果たしてアジアと世界のなかで日本の存在意義を高め、グローバリズムや市場経済万能の風潮のなかで起こりつつある新たな社会問題に対応できるのか。また、勃興しつつある知識労働者など新しい社会階層を基盤とする政党ができるのか。アジアとの真の和解と共生関係が築けるのか。いささか疑問を感じています。

長洲さんはつねづね、日本ではソーシャリズムとコミュニズムの区別が曖昧にされてきたことに不満をもっていました。たとえばソ連が崩壊し、東欧が解放されたとき、日本の多くの知識人もマスコミもいっせいに「社会主義の崩壊」「社会主義の敗北」を書き立てました。ところが、ソーシャリズムとコミュニズムが峻別されているヨーロッパでは、ソ連の崩壊＝コミュニズムの崩壊として受けとめられました。ヨーロッパを舞台にしたソーシャリズムとコミュニズムの長い対立の歴史からいえば、ソーシャリズムがコミュニズムに勝利したものと受けとめられたのでした。事実、その後イタリア共産党をはじめいくつかの西欧共産党は社会民主主義に転換していきました。ソ連のゴルバチョフがペレストロイカでめざしたのも北欧型の社会民主主義だったといわれています。

いま社民党が「絶滅危惧種」の危機にさらされていることが象徴しているように、日本政治のいわゆる「左翼バネ」が死語になってしまったほど衰弱したまま、政治の自閉化、情動化、右傾化が進んでいます。最近、アジアを歩くと日本のナショナリズムへの警戒心が高まっているのを感じますが、小泉内閣登場いらい、とくに日本政治の右傾化への懸念がつよまっています。

### (3) ミッテランになれなかった長洲さん

#### ●長洲さんの社民主義

長洲さんはよく「市場（資本主義）の失敗」と「計画（社会主義）の失敗」ということをいっていました。そして、あるべき社会体制は計画と市場をミックスした混合体制にならざるをえない、つまり「できる限りの市場と必要なかぎりの計画」ということであり、「きびしいルールの中での

自由な競争」ということです。きびしいルールというのは、市場万能主義ではなく、環境、安全、人権、社会的公正といった市場には委ねられない価値を守るために人間尊重の原則に立った社会的ルールをつくることです。そして、このルールのなかで最大限自由に競争させるということで、これはまさにヨーロッパ社民の考え方と同じものです。

その意味で、長洲県政の政治的本質は社会民主主義思想を軸に、中道から保守リベラルまでウイングを伸ばした「社民・リベラル政権」だったといえます。しかし長洲政権はすでに見てきたように、さまざまな形で「政策的先導性」を発揮し、全国的なインパクトをもちましたが、「社民リベラル」としての全国的な政治的インパクトは生みだせなかった。社民化が大幅に遅れた社会党との政治的ズレ違いが大きな要因でした。つまり「政治的先導性」は県政のみに限られ、政党レベル、全国レベルに及ぶことはなかったのです。

### ●国政への意欲を失った長洲さん

これは「知事職」にあるものの政治的限界だったかも知れません。私もその一人だったのですが、多くの人々の要請〈江田三郎、山岸章、武村正義さんなど〉に応じて長洲さんが国政の場に打って出れば、もっと別の展開があったかも知れません。かつて消滅寸前まで落ちぶれたフランス社会党が、思い切って党外からフランソワ・ミッテランを党首に迎えて奇跡の再生を果たし、政権党に復帰した（八一年大統領に当選、八八年再選）先例に学ぶべきでしたが、日本にはそうしたドラマを創れる人や組織が、残念ながらなかったのです。長洲さんが国政への意欲を失っていったのも、止むを得なかったのかもしれない。

ということは、長洲さんは結局、政治的ナショナル・リーダーに飛躍することなく、社民思想をもった、一人のすぐれた地方政治家、出色の知事として燃え尽きたといえるのではないかと、思います。国政への展望を失い、五期出馬という不毛の選択をあえてし、後継者選びにも失敗したことが、それを端的に示しているといえるかもしれません。私がそれを感じたのは、中央政治への「野心」を失い、知事に徹しようとして心に決めたらしい三期目の半ば過ぎでした。このころ私が大学への転進を図ったのも、一期、二期に見られた日本政治へのたぎるような情熱を長洲さんのなかに感じ取れなくなったからでした。

### ●知事職二〇年で燃え尽きた長洲さん

それにしても、長洲さんは知事という激職をよくぞ二〇年間頑張り抜かれたと思います。知事退任後わずか4年にして亡くなられたのは、まさに燃え尽きたとしかいいようがありません。長洲さんの好きな言葉に「不惜身命」というのがありますが、文字通り長洲さんは神奈川のために、「地方の時代」のために、身命を捧げられたのだと思います。

私は若い頃、オーストリアでクライスキー首相率いる社会党政権が一六年間も続いたという新聞記事を読み、いたく感動したことがありますが、長洲さんはそれを超える二〇年間、オーストリアとほぼ同じ人口八百数十万人を擁する神奈川で、多くの毀誉褒貶（きよほうへん）にさらされながら「大統領」の座を保ち続けたわけで、やはり偉大な業績を残された、戦後日本で「最も知事らしい知事」の一人だったといえるのではないのでしょうか。